

令和5年度第1回ふるさと講座「多賀谷三経とあわら」

福井市立郷土歴史博物館

学芸員 中西 健太

はじめに

- ・あわら市指定史跡「多賀谷左近の墓」(柿原36字40番)

多賀谷左近とは？

- ・安土桃山～江戸時代初期にかけて活躍した武将である多賀谷三経(1578-1607)のこと。
- ・関ヶ原の戦いの後、福井藩祖・結城秀康(徳川家康の二男)に従って越前に移り、柿原館(あわら市山十楽)を拠点に最大3万2000石という大名並みの領地支配を任された。

多賀谷氏とは？

- ・武蔵国騎西荘多賀谷郷(埼玉県加須市内田ヶ谷)を名字の地(由来)とする関東武士。
- ・南北朝時代に結城氏(下総結城氏)の家臣となり、室町時代以降は下妻城(茨城県下妻市)を本拠に勢力を拡大。戦国時代の多賀谷重経の代に領地は最大に(一説には20万石)。

多賀谷氏の分立

- ・三経は多賀谷重経の嫡男として生まれたが、天正17年(1589)に廃嫡。下妻城を出て島城(茨城県結城郡八千代町)に移る。その後、北関東の有力大名・佐竹氏(常陸佐竹氏)出身の宣家が重経の後継者に。

結城秀康に従う

- ・天正18年、三経は太田城(茨城県結城郡八千代町)を築いて本拠とし、結城晴朝の養子として結城氏の後継者となった結城秀康に従う(重経・宣家は佐竹氏に従う)。
- ・文禄2年(1593)、朝鮮出兵に際して三経は肥前国名護屋(佐賀県唐津市)に出陣。石田三成を介添えとして元服(三経の名は三成の「三」の字をもらったもの)。「左近将監」という官職に任官。

会津攻めと関ヶ原の戦い

- ・慶長5年(1600)、徳川家康が会津を本拠とする大名・上杉景勝(謙信の養子)を攻める際、三経は秀康の先鋒として上杉領近くの下野国大田原(栃木県大田原市)にいち早く布陣。上杉勢に備えて昼夜を問わず警戒。

越前国に移る

- ・関ヶ原の戦いに際して上杉氏を抑えた功績を評価され、秀康は越前国(68万石)を与えられ慶長6年に移る。
- ・三経も秀康に従い越前国に移り、慶長6年に秀康から46か村(計3万石)を任せられ、加賀前田氏への備えとして柿原館を構えた。慶長9年には2000石の加増を受け、支配を任された領地は計3万2000石となった(柿原三万二千石)。

三経の人脈

- ・三経は豊臣大名、秀康の与力・重臣として時の権力者や武将、官僚や公家と交流があった。

三経亡くなる

- ・慶長12年(1607)閏4月、主君・秀康死去。同年7月、三経も没する。
菩提寺は専教寺(あわら市柿原)

その後の多賀谷家

- ・三経の息子・泰経が継承。大坂夏の陣(1615)では多賀谷勢が38の首級を挙げる活躍。
- ・大坂夏の陣の翌元和2年(1616)、泰経死去。泰経には子どもがなく、弟を養子として跡を継がせようとしたが福井藩に認められず。
- ・三経の子孫はのちに秀康の五男・松平直基の家に仕え、江戸時代後半には家老職に。

多賀谷家の領地支配

- ・柿原知行帳(多賀谷文書)
- : 慶長17年時点、泰経期の越前国内の多賀谷家臣の知行地とその所在地が明記。
→多賀谷家臣知行地の合計は1万7000石強。(多賀谷家知行地全体の約55%)
→家臣の知行地に一つの村を丸ごと与えることは少なく、多くは相給地。

多賀谷家の支配とあわらし域

- ・柿原村(柿原)・清王村(清王)・拾楽村(山十楽)・西方寺村(山西方寺)など
→多賀谷家の本拠・柿原館を中心とする地域。多賀谷家の直轄地。
- ・上番村(上番)・中番村(中番)など
→多賀谷領内で最大の石高を有する上番村(2363石9斗8升1合)と第二位の中番村(2004石2斗8升2合)。上番村は53人、中番村は26人の多賀谷家臣が相給。
- ・吉崎浦(吉崎)・蓮浦(村)(蓮ヶ浦・坂口)
→吉崎浦は多賀谷家の直轄地。蓮浦は多くの多賀谷家臣が相給(11人)

三経統治時代の伝承

- ・三経統治時代に作られたという伝承
→橋屋、樋山のため池。滝のふたまたつつみ。

おわりに

- ・平成25年(2013)、三経の遺徳を顕彰し、その墓所の護持・整備を図ることを目的とする「多賀谷左近三経公奉賛会」が設立。
- ・平成27年、あわら市と下妻市は姉妹都市に。
→三経がそれぞれの地域にゆかりの人物であったことが一つの契機。